

中仙道紀行(二)

H
U
生

惠那文樂

田中氏は寡言である。何かしら大きな威厳を感じる、たま／＼私共に物を言ふ事がある、何時も叱つて居る様に聞える、しかも氏に叱られる事は少しも苦痛を感じない。

氏に従つて居て何時も安心した氣持で居る事が出来る、少しも精神の疲勞を伴はない、暗黙の裡に細い點まで注意して呉れる様な、温い息吹きが感じられる、之は私ばかりの感じではない、氏に接する者悉くがそう感ずるので、それ故に氏の周圍には大勢の人が蝟集する。

今日は田中氏の提案を實行するのだ、落合より馬籠、十

曲峠を越え、妻籠を経て讀書に出る舊中仙道踏破である、天氣の良いのが何よりで、田中氏も年來の宿望が達したとでも云ふ面持で、晴やかに見受けられた、實際忘れられた様な道をわざ／＼通行する事は時間的にさう餘悠のあるものではない。一行は其の前に、惠那神社所藏の惠那人形と、中津川にある陰陽石を見ねばならぬ。

陰陽石は徒歩で四五丁、細道の中に狭んで並んで居る誠に雄大な存在である、兩方とも殆んど相等しい面積、實に天然の妙である、天然か人爲かは知らぬが石の根元に薄が疎生して居つた。

更に惠那神社へ參拜する、そして文樂人形を見せて貰ふ

豫定なのである、先方でもチャンと用意して待つて居て呉れた、神社の側にさゝやかなる舞臺があつて其處に陳列して置かれてある。

説明によると阿波人形と云ふのだそつで大阪の文樂人形よりは形が少々大きいと言ふ話だ。また大阪のよりはズツト美しい光澤があると、成る程多少うすよごれては居るが、人形達はみんな艶々しい面をしてゐる。

一年には何度かの祭禮に此の人形は村民達に晴れの舞臺姿を見せるのであるが、年のあらまは倉庫の中にくすぶつてゐなければならぬ、それが堪えられぬと、冬の夜などには人形連の倉庫ではめい／＼が、唧ち、さゝやき、

或は啜り泣く聲が洩れると云ふ、あまりに名作なるが故に



検討し、人形共のさゝやきを肯定せられたとの事である、

落

である、殊に大岡裁き、白木屋の番頭丈八の顔は、私共の素人の眼にさへ傑作と思はれた、無氣味な燃光の如き色澤と、深酷なるそれは獸の本能に見る盲目的な意志の強さと言つた様な、

合

止むに止まれぬ執念、しかもおどけた表情には、修善寺物語の

附

夜叉王の仕事場や、北歐「スキーデン」あたりの妖怪談をまの

近

あたり経験するやうな恐怖で、ゾク／＼とする肉體の細い動きを押え付けるに困難であつた。

且つて小杉放庵が立寄つた時にもあの鋭い觀察眼を以てし細に

唐澤氏も田中氏も等しく嘆聲を洩らした。

人形の製作年代やら此處に存在してゐる理由、或は人形の名人某などの話も聞かせて貰つたが、記録して置かなかつたので残念ながら

忘れて仕舞つた。

最後に村の有志が人

形を使つて三番叟を見

せて呉れた村人に厚く

禮を述べて、うす氣味

の悪い零圍氣から逃れ

た。

馬籠

落合川を堰止める落合の堰堤を見學した、大井堰堤とは比すべくもない小規模のものであつた。

川を渡ればいよ／＼舊中仙道、一行の誰もが出来る丈身輕な装であつた、初夏の太陽は高く輝えて居た、梢を渡る

風が颯々と朗らかに行進曲を奏して呉れる。

私は昨日來の足の豆が痛を訴へる、どうにもたまらぬので靴を下駄にはき代えた、それに大きな寫眞機を肩に三脚

を持つた私は誰の目にも地元の寫眞屋としか

見えなかつた、落合を

過ぎて馬籠驛此處に

明治天皇御通輦の跡碑

が立つてゐる。文豪島

崎藤村の生家は此の石

碑の裏手に當る處にあ

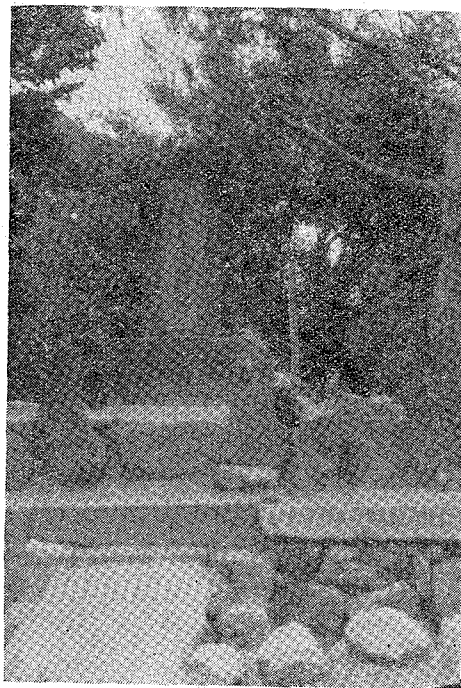
るとの話、近作夜明け

前の主人公も此の邊の

人物を取材したものである。藝術的氣品の高いもので、一九三五年のノーベル賞のリストに載せられてゐると噂を聞

いた。

眞偽の程は分明しないが兎にも角にも吾が國人にしてノ



明治天皇御通輦記念碑

「ベル賞授賞の噂のあつたのは、さきに野口米次郎、今度
島崎藤村、此の二氏しかないのである。

藤村の作品が温健にして多感なるは、幼少の折此の邊の
和かな自然のふところに育てられた此の温床が大部分の要
素をなすのであらふ。

馬籠峠

道は相當急峻である
灌木や熊笹、雜草の間
を道は一定の傾射を持
つて曲線を描き出して
ゐる、幅員凡そ一間半
要所、要所に丸石を
敷き詰めて舗装してあ



つた、石と石との隙間には、天然芝が濃い緑を隈取つてゐ
る。何時頃の舗装かは知らぬ、およそ中仙道の交通頻繁の
頃であらふ、木曾領が尾張藩の管轄になつてからであらう

と思ふ。整然と並んだ此の盆石は少しの凸凹もない。相當
優秀な築造技術なのだらふ、道中至る所に見受けられ、そ
れが相當長距離に亘つてゐた、之によつても此道が如何に
重要な幹線であつたかを察知することが出来る、何時の世

に於ても資本は利益の
效用大なる處に投ぜら
れる。

舊中仙道鋪裝

此處で撮影は頻繁に
行はれた、三脚を立て
ビントに合し、シャツ
ターを切る、其の度毎
に田中氏から「早くせ
えよ、何しとんチャイ」
の御小言を頂戴する。

カメラマンは辛い、漸く風景を種板に藏ひ込んで、人間
より大切な高價なる所の機械を大切に、……一行のあとを
追ふのである。

太陽は頭の上、汗は川の如く、水は飲みたいがそれは不
充分である。洞、然しそれ等は今では圓らかな思出となつ
てゐる。

處にも水はない、いつその事雄瀧までノシて仕舞へと云ふ
事になつた。
唐澤氏は、峠を上る時は馬鹿に落ち付いて居られるが、

馬籠峠にやつて来た

頃、一行は幾分疲労を

覚えて来た、さいぎる

何物もない日光の直射

ムツトする草いきれ、

これ等は日頃の強情を

通用させない、正午過

の時計は一秒毎に空腹

を刻むのである、晝食

をとるべく日蔭の涼し

い場所を選んだが、格好のところは見つかりさうにもな

つた。

峠の小高い處へ上つて見たら其處は三十坪ばかりの天然

芝原で、放し飼の馬の親子がのんきに草を食んで居た。其



雄

瀧

下りになると、とてつ
もなく早い、マラソン
の如く走る、之に續く
には懸命の努力を要す
る、雄瀧は割に遠くな
かつた。

とから、しぶきを上げ瀧壺めがけて白龍の様に突進する。
清烈な流れに口をすゝいで辨當をしたゝめた。
吾々の肉體からは暑熱も、汗も、空腹も一遍に飛び去つ

たその代りに液體タンサン瓦斯の快い味が、腹の中まで透

み込んで行く。

此處で撮影、瀧の白煙をバックに一行の像が永久に其のまゝの形で乾板に残る。

腹が出来たら戦争だ、先は長い、まだまだ吾々は道中と

取組まねばならぬ、エ

ネルギーの作用とは斯くも偉大なるものか、

齒車は圓滑に廻り出した、疲労とは一體どんな感じのものだ。一氣

に妻籠を過ぎ、讀書村に妻籠に到着する。

吾妻橋に到着する。

落合 一里五丁

馬籠 二十一間

妻籠 二里

三留野 一里半

顧みれば此の道は徳川幕府盛んなりし頃中部日本を貫く

唯一の幹線として如何に重要せられたか、日光奉幣使の通

行も此處を通過せねばならなかつた。西國大名の參觀交代

幕府献上の茶壺大小ありとあらゆる通行に利用せられた。

併しながら時代の變遷は、道路築造技術の發達は、さし

も重用せられたこの道を、わずかに一個の山道としてしま

つたのである。物質萬

能の世には單なる歴史

的價値は要求せられな

い、産物は道路を要求

するであらふ、これは

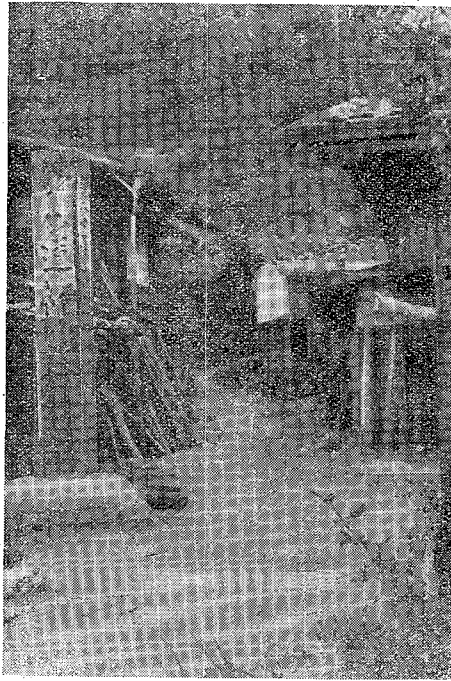
迫接人々に利益關係を

及ぼす、産物の皆無な

處はスピードの犠牲と

なるのである。

吾妻橋附近



木曾の五木

落合に於て分岐した、中仙道舊道と、國道とは讀書村に於

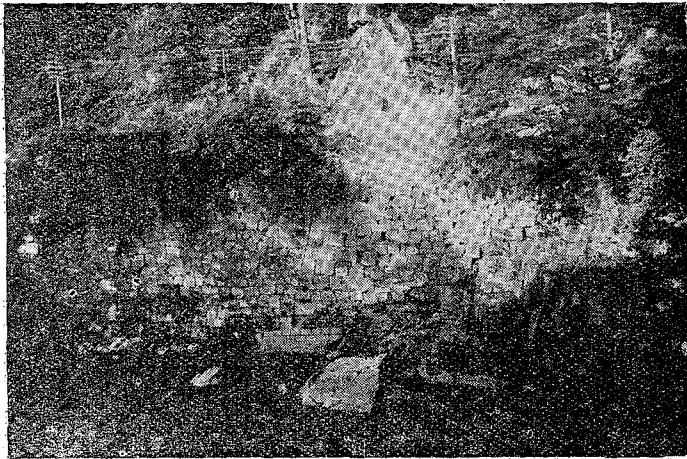
て合する、一行の踏破も此處に完了したのである、車が待つて居て呉れた、車中の人となり重荷を下ろした氣分の、面に表はるゝを禁じ得ない、一行の誰もが自身の肉體、殊に兩脚に對して感謝を捧げながら今過ぎたばかりの生々しいコースへの追憶にふける。

國道は木會川と殆ど平行に伸びて居る、木會御料林の所謂立木を透して清烈な激流が陰見する。

木會の五木とは檜、榎、明檜、

高野槇、檜で、御維新までは尾張藩の管轄であつた、其の保存に最も嚴重を加へた。

この地方には巢山、留山、明山の區別があつて、巢山と留山とは絶対に村民の立入ることを許されない森林地帯であり、明



が吟味のため、村へ入り込むといふ噂でもあると、猪や鹿

山のみが自由林にされてゐた、この明山でも、五木は許可

なしに伐採することを禁じられてゐた、これは森林保護の精神より出たことは明で、木會山を管轄する尾張藩がそれほどこの地方から生れて來る良い材木を

重く見てゐたのである、取締りはやかましいが少く怠りでもあると木會谷三十三ヶ村の庄屋は上杉の障屋へ呼び出される。

その度に庄屋は、背伐りの嚴禁を犯した村民のため、云ひ開きをしなければならなかつた。

どうして檜一本でも馬鹿にはならぬ、障屋の役人の目は人間の生命よりも重く見た、この役人

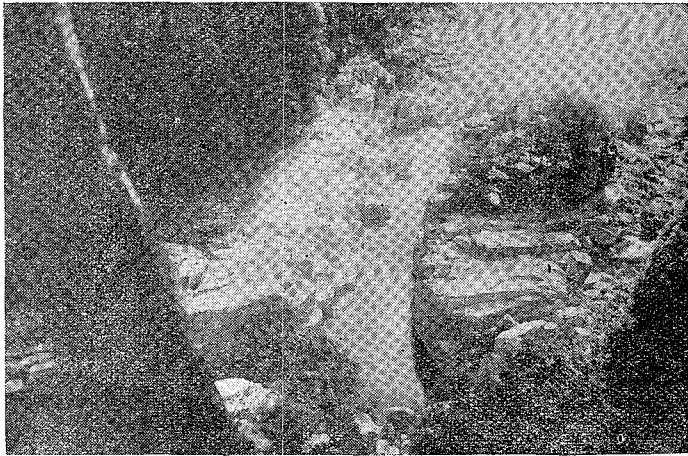
どころの騒ではなかつた。あわてゝ不用の材木を焼き棄てるものがある、圍つて置いた檜板を他へ移すものがある、多分の木を盗んで置いた、板にしたり、賣捌いたりした村の人などは殊に狼狽する、背伐りの吟味と言へば、村中家探しの評判が立つほど嚴重をきはめた。(夜明け前八九頁)

今は御料林となつて宮内省の臺帳に一本残らず登録されてゐる。

木曾 棧道

棧や命をからむ罵かづら

といふ芭蕉の句の、有名な木曾橋跡に至る、此處は須原と上松との間にある。昔は恐ろしい而も長さ六十八間と云ふ棧道であつたが今はその痕跡すら認め居



木曾義康義昌に至つて福島に城を築き今の道が出来たので

ない。が、青黒い淵に絶壁の如くそゝり立つ高い石垣が當時の險を彷彿させる。

此の景色をカメラに収めたが光線引きで失敗してしまつた。

歸宅してから田中氏に、行程を撮影したアルバムを持參して、

「大體に於て失敗はありませんでしたが、一枚棧道跡がうまく行きませんでした」と報告した時「何やとそれが一番大切ナンヂヤ」と叱られて閉口した。

木曾街道は谷中と呼んだ處で義伸の父義賢、久壽三年悪源太義平のために討たれ、義幼幼時駒王と云ひし頃、此の山中に中原兼遠に養はれて人となつた後

であらふ、傳ふ所によれば今の棧道は天文十四年の開鑿で

ら趣もあつたかも知れぬが幕末の木曾の棧は何等危険の感

あると、然らば木曾義昌、福島在城時に當る、其後慶長五年に至りて家康、山村甚兵衛の功を賞して爾來此の谷中の管理を命ぜし以來代々其の職を襲ひ關所をも管理して治績を上げた。

後其所領を尾張家に移さるゝに至るも依然山村氏をして管理せしむ。而して道を木曾河邊にとり數十丈の石垣を築き道路平坦復た旅行をして危懼なからしめたるものは寛保年間尾州が藩費を以てしたのである。

棧道の跡は今は何の風情もない芭蕉の句を讀むだのは元祿前後であつて、無論改修した寛保を距る事五十幾年か前であるか

の奇勝寢醒の床を現出してゐる、自然の傑作は臨川寺の高



上 岩 床 の 醒 寢

を生ぜない、殊に文久元年和宮御降嫁の時は木曾路御通行があつたが爲に幕府も諸藩に命じて沿道を出來得る限り改修を行つた。(龜畑雪湖江戸時代の交通文化歴史、地理第八卷第十二號藤田明木會雜考)

寢醒の床

一行は、木曾街道中白眉の勝地寢醒の床を探勝する、木曾川の清流が花崗岩壁の間に湛えられて、象岩、獅子岩、釜石等など夫々名付けられた寄岩怪石が底知れぬ深淵に臨んで所謂天下

い境内が足下に瞰下する事が出来る、廣い河原の中に岩壁がソツト片寄せられた格好であつた。流が帯の様にそれを貫いて居る、大いなる盆景の趣である、六月の午後の光線は強烈にふり注いで直視するに堪えない反射があつた。

小憩の後、河原へ降つて浦島太郎の氣分を喫しようと企てた、河原は案外廣い、高い所から見下ろした時には小石位に思つたのがどうして巨大な石塊である。河原を構成する石の殆んどがそれで、流れに辿りつくのは容易でなかつた。花崗岩の角の擦れた圓い奴の上を次から次へと移らなければならぬ初夏の光に擦り切つた岩の上を肝を冷しながらハネて行く、とんだ喜劇だ、予看とは斯ふのを、云ふに違ひない。よう／＼にして例の岩壁へ昇る事が出来た、盆景どころの騒ぎではない。其處に直立して始めて雄大なる景觀を知る事が出来る。小山の様な岩壁だ、水はどうして此の堅い花崗岩に深い溝を穿つ事が出来たのか、黒渦を巻立て流れて居る、紺碧その様な形容は此處ではあてはまらない。青黒だ此の水の色は、

私などは此の様な處では恐ろしくて釣をする事などは思ひもよらぬ、若し糸を垂れたとしたならばあべこべに引込まれて仕舞ふだらふ、凡人と仙人とはこふ謂ふ所に相違がある恐らく浦島も此處で大公望の様に眞直な釣針で自然の氣を釣つて居た事だらふ。

浦島の傳説と云へば吾國の傳説中最も興味の深い且最も知られたものであらふ、相當古くから吾國民に愛されて居たのだ、萬葉卷九なる長歌に水は浦島を詠める一首として収録されてある参考の爲に掲載さして貰ふ。

春の日の霞める時に 住吉の岸に出で居て

釣船のとをらふ見れば 古の事ぞ念ほゆる

水江の浦島兒か 堅魚釣り 鯛釣り矜り

七日まで 家にも來ずて 海界を 過ぎて傍ぎ行くに

海若の 神の女に 邂に い傍ぎ向ひ あひとぶらひ

こと成りしかば かき結び 常世に至り 海若の

神の宮の 内の重の 妙なる殿に 携はり 二人入り

居て 老もせず 死もせずして 永き世に 在りける

ものを世の中の 愚人の 吾妹子に 告りて語らく
 須叟は 家に歸りて 父母に 事も告らひ 明日の如
 吾は末なむと 云ひければ 妹がいへらく 常世邊に
 また歸り來て 今のごと 逢はむとならば この篋
 開くな努と 許多に 堅めし言を 住吉に 還り來り
 て 家見れど 家も見かねて 里見れど 里も見かね
 て 恠しと そこに念はく 家ゆ出で、三歳の間に
 塙も無く 家滅せめやと この篋を 開きて見ては舊
 の如 家はあらむと 王篋 少し開くに 白雲の 箱
 より出で、常世方に 棚引きぬれば 立ち走り 叫
 び袖振り 反倒び 足すりしつゝ たちまちに 情消
 失せぬ 若かりし 膚も皺みぬ 黒かりし 髪も白け
 ぬ ゆなゆなは 氣さへ絶えて 後つひに 壽死にけ
 る 水江の 浦島子が 家地見ゆ

佐々木信綱氏の説に従へば、この傳説の原形には、神仙
 傳説の中に、上代の漂流談がまじつてゐるのではなからう
 かと、墨の江の海士が漂ふて海外に至り、在る事數年歲月

の過ぐるも知らず、老い衰へて故郷に歸つて來た、その海
 外で、うつくしい殿に住み、佳人と契つたと云ふ様な夢物
 語や、携え歸つた箱に就いての説話などが、傳説の根底と
 なつたものではなからうか、丹後風土記に掲げられたもの
 は支那風に潤飾され、殊に支那の神仙譚の思想の影響を受
 け入れて居ると思ふのである。寢醒の床の傳説は、三歸の
 翁と言ふ神仙不思議の翁が、此底知れぬ深潭に釣を垂れて
 悠々自適した所から浦島太郎と結び付けられる様になつた
 のだと、

土地の人は此の淵に投身したものは永劫浮き上る事がな
 いと語る、木曾川で材木流しをするとき、岩床の下部が一
 帯に空洞をなして居るため、それに材木が入つて仕舞ふこ
 とがある。流れが渦を巻いて居るから岩床に吸付く次に入
 つて來た材木も同様に吸付く斯くして床の下は流木の格子
 が出來上る。それ故に人間が若し此處へ入つた場合には浮
 ぶ事が出來るのだとその理由を説明した、最も之は推則で
 あるかと前置をして、

岩の上のさくやかなる、ほこらをバックに記念撮影をした。險阻な河原を辿つて漸くに引返す、臨川寺の内には、浦島の用ひたと云ふ釣竿が祀つてあつた、一行も拜見に及んだが、吾々の目頃見なれた釣竿とは甚だ趣を異にしてゐた。太短い竹の軸から枝が四五本伸びて居て、その各の枝先に糸と針がしつらへてある誠に奇妙な格好であつた。

こゝで名物「そば」を御走になつた。少々のみ鹽梅であつたがうまかつた第一に色澤が食欲を刺戟した、そばでは日光の高井屋の栗山そば並に箱根宮城野村の宮城野のそばもうまいがこゝのも相當の味であつた。

唐澤局長が、「そばを食ふた後に、そば湯をのまぬ奴は、そばを食ふたとは言へない、そばのカスを食ふんだ。」としきりに、そば湯をすくめて居られた。

やがて此處を辭した一行は一路福島町に向ふ。

×

×

×

- 〔桑の中から、小唄がもれる、小唄、きゝたや
小唄きゝたや、顔見たや、(ソリヤコイ、アバヨ)〕
- 〔東や赤石、西は駒ヶ嶽、間を流るゝ、間を流るゝ
天龍川、(ソリヤコイ、アバヨ)〕
- 〔取れたゝよ、藪がうんと取れた、雪の山ほど
山の雪ほど、たんと取れた、(ソリヤコイ、アバヨ)〕
- 〔天龍川原で、晝寝をしたら、鮎と鯉との、
鮎と鯉との、夢を見た、(ソリヤコイ、アバヨ)〕
- 〔信州名物、かずあるなかに、わすれ、しやんすな、
わすれしやんすな、伊那ぶしを(ソリヤコイ、アバヨ)〕
- 〔ほろゝほろゝと、須坂の町の、寝ずの番やら、あの
お月、(ヤ、カッタカタノダ、ソリヤカタタノダ)〕
- 〔飛驒の高山、たかいといへど、ひくいお江戸が、
見えやせぬ、〕
- 〔須坂、名物、生糸の産地、可愛いむすめが糸をとる、
わたしや伊那の谷、谷間の娘、かひこ、こはがる、
かひここはがる、子は産まぬ〕